

G10-01

調査研究 中間報告 第463号

生きる力を育てる道徳科授業づくりに関する研究

令和7年3月
千葉県総合教育センター

生きる力を育てる道徳科授業づくりに関する研究

千葉県総合教育センター

カリキュラム開発部研究開発班

1 主題設定の理由

第4期教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）や、第4期千葉県教育振興基本計画（原案）に「豊かな心の育成」が明記されている。（図1）子供たちに豊かな心を育むことをねらいとする道徳教育を充実させることは、喫緊の教育課題の一つである。

平成30年度には小学校、翌令和元年度には中学校において「特別の教科道徳」（以下、道徳科）が全面実施された。その全面実施から、3～4年目にあたる令和3年度に、学校及び教育委員会を調査対象とした令和3年度道徳教育実施状況調査（文科省）が実施された。その結果から、道徳科の教科化が目指した量的確保及び質的転換の面で一定の成果が挙げられている様子が分かる。一方で、道徳教育・道徳科授業の推進・実践・評価にほぼ全ての学校が課題を感じていることが分かる。（図2）さらに、同調査から、学校が道徳科を含む道徳教育の充実に向けて参考としている情報として、指導書以外に教育機関により良い道徳科授業づくりのための資料の提供や、研修の充実・実施を求めていることが分かる。（図3）

令和3年度道徳教育実施状況調査は、調査対象を「学校及び教育委員会」としている。本調査研究では、その知見も参考にしながら、「県内の教員」を対象に調査を行う。そして、調査から見える県の道徳科授業づくりの実態を基に、子供たちがこれからの時代を生きる力を育てる道徳科授業づくりに向けた資料作成や研修づくりを進めていく。（図4）

以上のように、本調査研究は、県内教員の道徳科授業づくりに関する実態を基に調査研究を行い、これからの時代を生きる力を育てる道徳科授業づくりの方向

1 主題設定の理由

第4期教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）

目標2 豊かな心の育成【基本施策】道徳教育の推進
自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、「特別の教科 道徳」を要した道徳教育を推進する

第4期千葉県教育振興基本計画（原案）（千葉県/千葉県教育委員会）

【基本目標2】未来を切り拓く「人」の育成

施策8 豊かな心の育成
(1)豊かな情操や道徳心を育む教育の推進
子供の発達段階に応じた体系的・系統的な道徳教育の推進等

図1 研究発表会スライド資料より

1 主題設定の理由

令和3年度道徳教育実施状況調査（文科省）
【調査対象】学校（全国公立小・中・義務教育・中等教育学校（前期課程））及び教育委員会

設問	（課題について） 回答	（課題について） 「特になし」
道徳教育を推進する上での課題	98.6%	1.4%
道徳科の授業を実施する上での課題	99.9%	0.1%
「道徳科」の評価を行う上での課題	98.4%	1.6%

道徳教育・道徳科の推進・実践・評価にあたり、ほぼ全ての「学校」が課題を感じている

図2 研究発表会スライド資料より

1 主題設定の理由

令和3年度道徳教育実施状況調査（文科省）

道徳科を含む道徳教育の充実に向けて参考としている情報（複数回答可）

都道府県・市区町村の教育委員会や教育センターが主催する研修

都道府県・市区町村の教育委員会や教育センターが作成した資料

「学校」は、教育機関に道徳授業づくりの研修や資料を求めている

図3 研究発表会スライド資料より

1 主題設定の理由

令和3年度道徳教育実施状況調査（文科省）

【調査対象】学校（全国公立小・中・義務教育・中等教育学校（前期課程））及び教育委員会

本調査研究
「県内」の「授業を実際に行っている教員」を対象に調査

県の実態に基づいた研修・資料づくり

図4 研究発表会スライド資料より

性を明らかにすることを目指して進めていく。そして、調査研究の過程で「成果物」や「研修コンテンツ」を作成する。これらの普及を通して、より良い道徳科授業づくりの一助となることを願い、本研究主題を設定した。

2 研究の目的

道徳科に対する教員の実態調査を通して、道徳教科化の成果と課題を明らかにし、これからの時代を生きる力を育てる道徳科授業づくりの方向性を明らかにする。

3 研究計画

令和6年度	令和7年度
<ul style="list-style-type: none"> ○調査研究計画立案 ○道徳科授業づくりに関する実態調査についての基礎研究(有識者助言等) ○県教員実態調査及び分析 ○次年度調査研究(「成果物」作成)の方向性の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ○道徳科授業づくりについての基礎研究(有識者助言・文献調査など) ○実践事例等収集 ○成果物の作成及びWebアップ ○研修コンテンツ作成 ○広報資料作成(リーフレット等)

4 研究概要

- (1) 令和6年度(調査研究1年目:基礎研究)
調査研究の方向性を明らかにすることを目指して、「道徳科授業づくり」に係る県の実態調査(質問紙調査・聞き取り調査)や文献調査(国や県の通知・先行研究・他自治体の研究等)を行った。(図5)

※その詳細は「6 今年度の取組」参照

- (2) 令和7年度(調査研究2年目:実践研究)
令和6年度に見出した調査研究の方向性を基に、実践研究を行う。具体的には、文献調査を通して道徳科授業づくりに関する情報収集・整理をしたり、県内協力員・協力校の取組や実践事例をまとめたりする。そして、その内容を道徳科授業づくりに関する「成果物」や、研修で活用するコンテンツにしてまとめる。(図6)

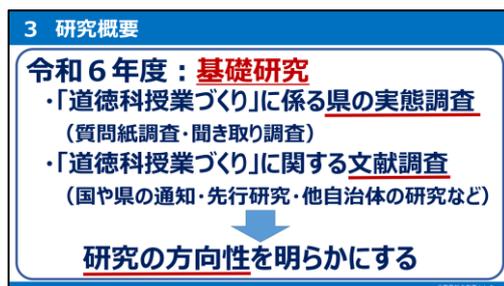


図5 研究発表会スライド資料より

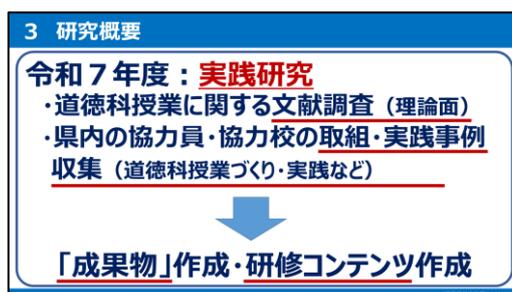


図6 研究発表会スライド資料より

5 研究組織

- (1) 共同研究者(研究会議講師)

ア 土田 雄一(千葉大学グランドフェロー・敬愛大学教育学部教授)

イ 松田 憲子(神田外語大学英米語学科准教授)

(2) 研究協力員・協力校

令和7年度（調査研究2年目：実践研究）実践事例など収集のため、各教育事務所に研究の概要を説明し、道徳科授業づくりに優れた教員や、学校全体で道徳教育や道徳科授業づくりに取り組む学校等の推薦依頼をする。

6 今年度の取組

(1) 質問紙調査

ア 調査の概要

県内教員の道徳科授業づくりに関する実態を把握するために、質問紙調査（Web アンケート）とインタビュー調査の2つを行った。（図7）

その概要については表1の通りである。

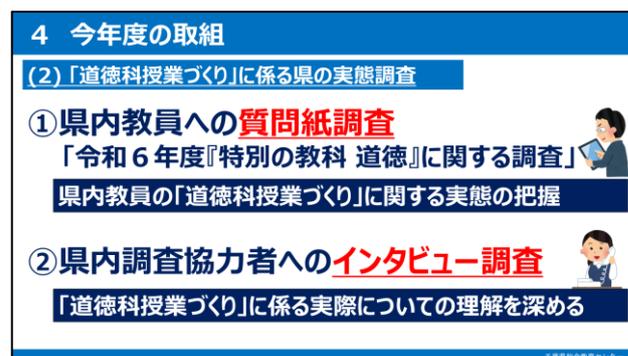


図7 研究発表会スライド資料より

表1 調査概要について

調査の概要
<p>(ア) 質問紙調査（Web アンケート）</p> <p>「令和6年度『特別の教科 道徳』に関する調査」</p> <p>【目的】道徳に関する教員の実態調査から、道徳科授業づくりや研修に関するニーズを把握し、学校現場に有用な調査研究資料や研修づくりに活用する。</p> <p>【対象】小・中・義務教育学校教員（講師を含む）のうち、実際に道徳科授業を受け持ったことがあり（教育実習を含む）、本調査に協力できる教員</p> <p>【内容】松田・土田の調査質問内容（2019）を参考に、道徳科についての意識・理解の様子・困り感・求める情報など、全部で20の質問</p> <p>【方法】Web アンケート（「ちば電子申請サービス」を利用）</p> <p>【期間】令和6年8月中旬から9月中旬まで</p>
<p>(イ) インタビュー調査</p> <p>【目的】道徳科授業づくりの実際についての聞き取り調査を通して、その実態や困り感などを具体的に把握し、今後の道徳科授業づくりに関する調査研究の方向性を検討するデータを得る。</p> <p>【対象】研修受講者から協力を申し出た教員（以下、調査協力者）</p> <p>【内容】「道徳科の授業で難しさを感じること」「求める資料や研修」など（質問数は全部で5つ）</p> <p>【方法】電話による半構造化インタビュー</p> <p>【期間】令和6年10月</p>

イ 調査の結果

(ア) 回答者の状況について

a 質問紙調査（Web アンケート）

全回答数は2,525件であった。本調査研究では、そのうち回答不備等の見られた回答者の回答データを除いた2,475件を分析の対象とした。

分析対象とした回答者の状況については、表2～表7のとおりである。

回答者の状況を見ると、回答した教員の「年代」「地域」「専門教科」が多岐にわたること、また、「道徳科研究経験の有無」などについてもばらつきがある様子が分かる。

これらのことから、本調査の結果を県の実態として扱うことの妥当性は高いと考える。

表2 回答者の学校種

学校種	小学校	中学校
	1,821名	654名

表3 回答者の経験年数

教員経験年数	0～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20～30年未満	30年以上
	472名	591名	831名	285名	296名

表4 回答者の所属地域

所属地域	葛南	東葛	北総	東上総	南房総
	855名	367名	581名	318名	354名

表5 回答者の専門教科

※1 専門教科	国語	社会	算数・数学	理科	生活 ※2	音楽
	611名	233名	604名	168名	50名	79名
	図工・美術	体育・保健	技術・家庭	外国語・英語	総合	特活・学活
78名	285名	46名	189名	61名	71名	

※1 小学校は「最も関心が高い教科等」とした

※2 小学校教員のみ回答

表6 回答者の道徳研究校における研究経験

道徳研究校に おける研究経験 ※3	ある	ない
	779名	1,696名

※3 2018年度の「道徳の教科化以降の研究経験」とした

表7 回答者の道徳科授業参観経験

道徳科授業参観の 経験について ※4	ない	1回	2～3回	4回以上
	409名	496名	866名	704名

※4 2018年度の「道徳の教科化以降の研究経験」とした

b インタビュー調査

夏季に行われた研修において、本インタビュー調査に156名の受講者が

- 協力を申し出た。その内、勤務地域・年代・教員経験年数等が偏らないように調整を図り、20名の教員を調査協力者としてインタビュー調査を行った。
- (イ) 道徳科への関心（質問紙調査（Web アンケート）より）

「道徳科に関心がありますか。」という質問への回答は図8の通りである。

道徳科への関心について、82.6%の教員が肯定的な回答（「関心がある」）をした。このことから、道徳科授業づくりに関する本調査研究の実施及び成果物等を通じた情報提供は有用と考えられる。

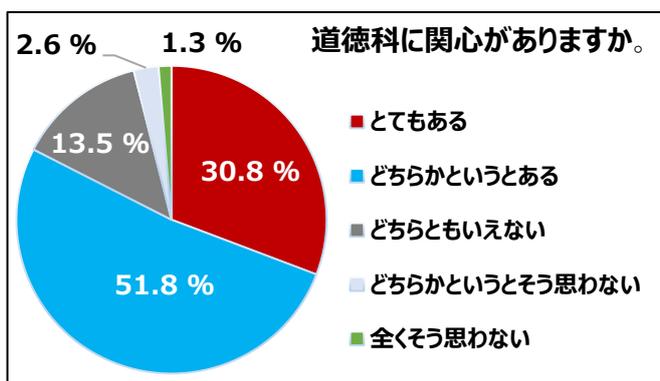


図8 道徳科への関心

- (ウ) 道徳科についての理解（質問紙調査（Web アンケート）より）

「道徳科授業の基本的な展開について理解できていると思いますか。」という質問への回答は図9の通りである。

道徳科の授業の基本的な展開について、75.3%の教員が「理解できている」と認識している。これは、各教員の研鑽や、各種研修等による一定の成果と考えられる。

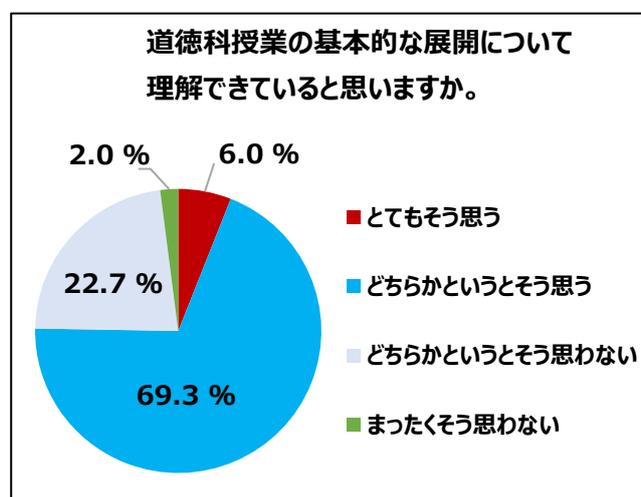


図9 道徳授業の基本的な展開についての理解について

一方、令和3年度道徳教育実施状況調査（文科省）では、「ほぼ全ての『学校』が課題を感じている」という結果が見られた。この課題がどのような点にあるかを探るために、「基本的な展開が理解できている」と自己評価した教員の自由回答を分析し、「道徳科授業に感じること」としてまとめたものが表8である。

表8 「理解できている」と自己評価する教員の自由回答より（一部抜粋）

道徳科授業に感じること	実際の回答
評価の難しさ	子供たちの心の動きや変化を評価することが難しい。
授業の難しさ	生徒が本音を話すことが難しく、模範的な回答をしがちである。
教材研究の迷走	教材研究を深めれば深めるほど、着地点が迷走してしまうことがある。どうしても国語のようになってしまうことがある。

表 8 から「道徳科の授業の基本的な展開について理解できている」と回答しつつも、道徳科の教材研究や授業実践、そして評価等について、迷いや難しさも感じている実態がうかがえる。

同じ質問について、学校種別にまとめたものが図 10 である。

道徳科の授業の基本的な展開について、小学校は 76.4%、中学校は 72.2% の教員が「理解できている」と認識している。道徳科の授業の基本的な展開についての理解は、学校種による大きな違いはないと考えられる。

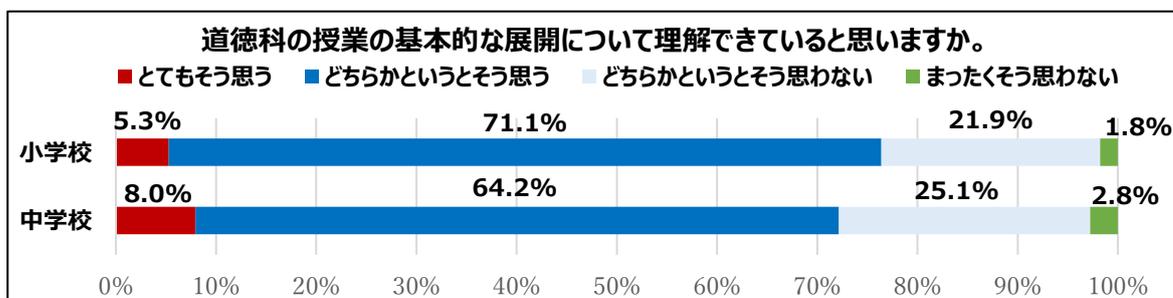


図 10 道徳科授業の基本的な展開についての理解について（学校種別）

さらに、同じ質問について教員経験年数別にまとめたものが図 11 である。

「道徳科の授業の基本的な展開について理解できていると思うか」について否定的（「理解できていると思わない」）な教員の割合は、0～5年未満の教員で 43.8% と最も多く、教員経験年数が増える程、少なくなる傾向を見て取ることができる。若年層教員への支援が求められると考えられる。

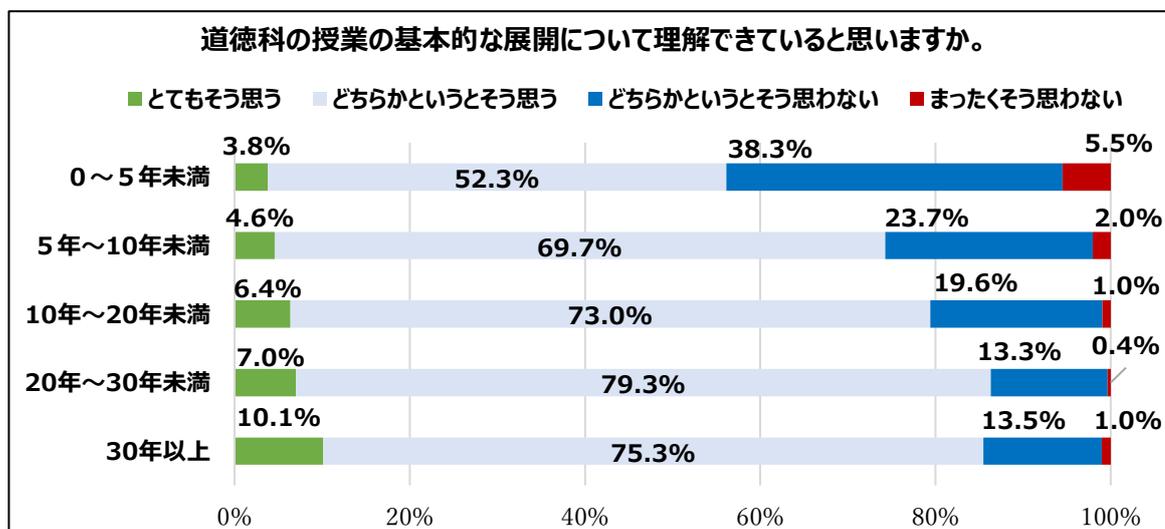


図 11 道徳科授業の基本的な展開についての理解について（教員経験年数別）

(エ) 道徳科と他教科等についての認識（質問紙調査（Web アンケート）より）

「道徳科と他教科等の授業づくりに違いがあると思いますか。」という質問への回答は図 12 の通りである。

道徳科と他教科等の授業づくりについて、42.1% の教員が違いを感じていることが分かる。

同じ質問について教員経験年数別にまとめたものが図 13 である。

「道徳科と他教科等の授業づくりに違いがあると思うか」について、強い肯定（「とてもそう思う」）を示す教員の割合は、0～5年未満の教員で 20.1%

と最も多く、教員経験年数が上がる程、少なくなる傾向を見て取ることができる。

次に、道徳科と他教科等の授業づくりに違いを感じている教員が、どのような違いを感じているかを探るために、違いを感じている教員の自由回答を分析し、「道徳科と他教科等の授業づくりに感じる違い」としてまとめたものが表9である。

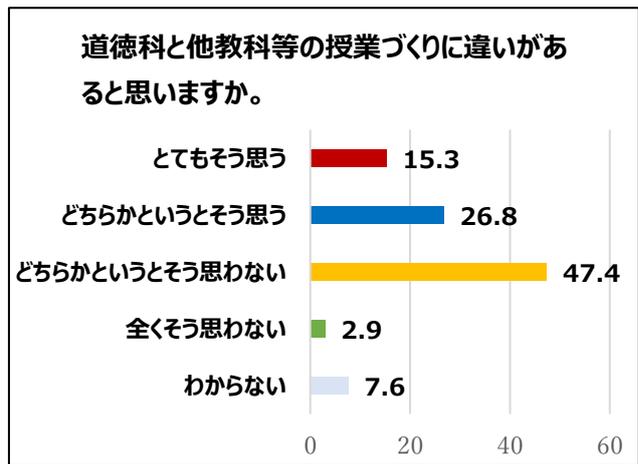


図 12 道徳科と他教科等の授業づくりに違いを感じるか

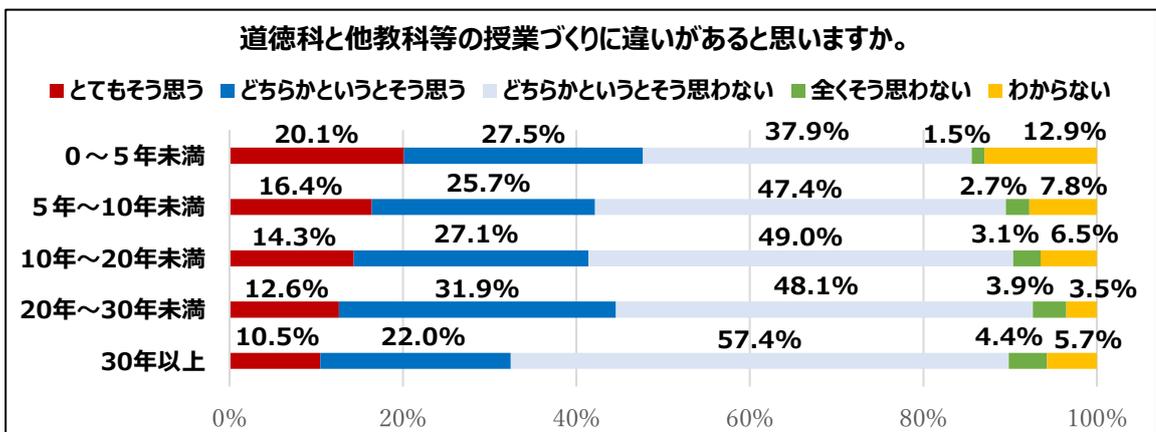


図 13 道徳科と他教科等の授業づくりに違いを感じるか（教員経験年数別）

道徳科の特質について、「道徳科は、児童一人一人が、ねらいに含まれる一定の道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間である。」と明記されている（「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編」（以下、解説）, p. 78）。

これらの結果から、若年層教員が、道徳科の特質を理解した上で道徳科授業づくりができるような支援（資料作成等）が求められると考える。

表9 道徳科と他教科等の授業づくりに違いを感じる教員の自由回答より（一部抜粋）

道徳科と他教科等の授業づくりに感じる違い	実際の回答
答えが明確ではない	答えがないため、授業の組み立て方がよく分からない。
評価の難しさ	授業内容がどの程度身に付いたのか見取ることが難しい。
授業の難しさ	他教科等以上に予想される答えを考え、それを基に授業をつくっていく必要があるから。
単元がない（授業が1時間扱い）	道徳科は1時間展開の学習だと思うから。
学習活動の独自性	知識ではなく、心情を育てる学習だから。

(ウ) 道徳科の授業づくりで力を入れていること（質問紙調査（Web アンケート）より）

「道徳科の授業づくりをする上で、力を入れていることは何ですか。（3つ選択）」という質問への回答は図 14 の通りである。

最も回答が多かったのが「発問」（66.6%）で、次いで「ねらいを設定した授業づくり」（47.4%）、「導入」（39.8%）、「話し合い」（39.0%）、「振り返り」（30.9%）であった。このことから、「考え、議論する道徳」の実現に向けて、各教員が日々の道徳科授業をより良くしようと努めている様子が分かる。

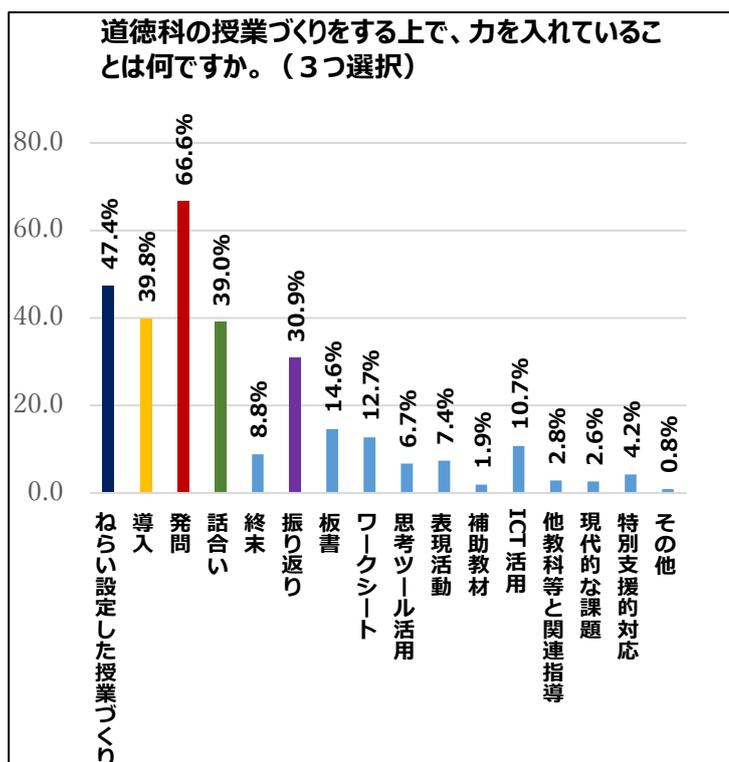


図 14 道徳科授業づくりにおいて力を入れていること

(カ) 道徳科に感じる難しさ（質問紙調査（Web アンケート）より）

「道徳科は他教科等の指導と比べて、難しいと思いますか。」という質問への回答は図 15 の通りである。

道徳科に、他教科等以上に指導の難しさを感じている教員が 74.8% と多くいることが分かる。道徳科の指導に難しさを感じる教員が多いこと背景には、表 9 にあるような「道徳科と他教科等の授業づくりに感じる違い」もあると考える。

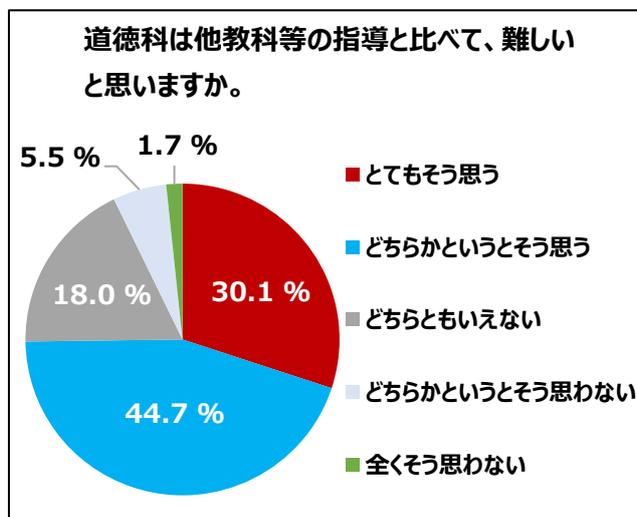


図 15 道徳科に難しさを感じる教員の割合

同じ質問について、学校種別にまとめたものが図 16 である。

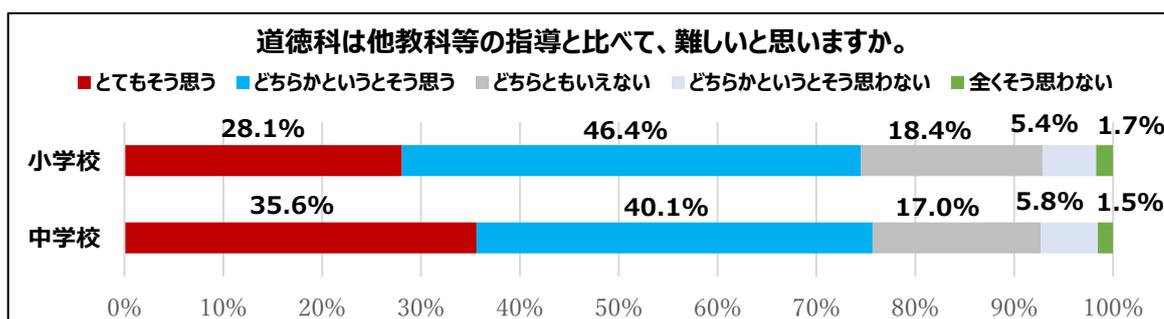


図 16 道徳科に難しさを感じる教員の割合（学校種別）

小学校は74.5%、中学校は75.7%の教員が、道徳科の指導に他教科等以上の難しさを感じていることが分かる。比較をすると同じ程度の割合だが、その回答内訳を見ると、中学校の方が強い肯定（「とてもそう思う」）をしている教員が多いことが分かる。

さらに、同じ質問について教員経験年数別にまとめたものが図17である。

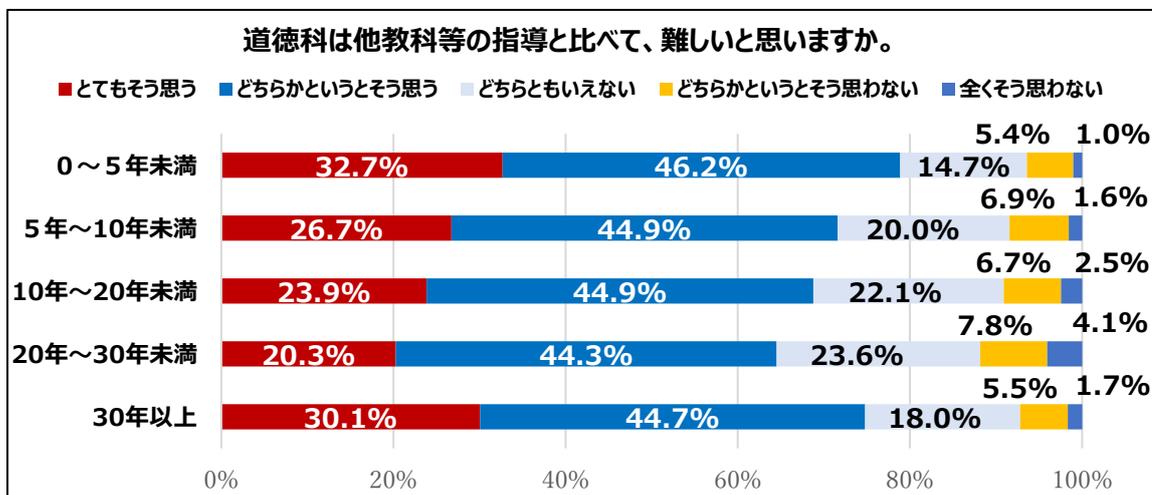


図17 道徳科に難しさを感じる教員の割合（教員経験年数別）

「道徳科の指導に難しさを感じている」教員の割合は、0～5年未満の教員で78.9%と最も多く、教員経験年数が上がる程少なくなる傾向を見て取ることができる。一方で、30年以上の教員で74.8%と、道徳科の指導に難しさを感じる教員の割合が多くいることが分かる。

これは、①教員経験年数が少ない程、道徳科授業づくりに難しさを感じていること、②30年以上のベテランは、道徳科授業づくりについて「課題意識」や「悩みの質」が異なることの表れ、と考えられる。

(キ) 道徳科の授業をする上で難しいと思うこと

a 質問紙調査（Web アンケート）より

「道徳科の授業をする上で、難しいと思う点は何ですか。難しいと思う順に3つ選んでください。」という質問への回答は図18の通りである。

最も回答が多かったのは「発問」(61.4%)で、次いで「話し合い」(34.4%)、「評価」(29.0%)、「ねらいを設定した授業づくり」(28.3%)、「終末」

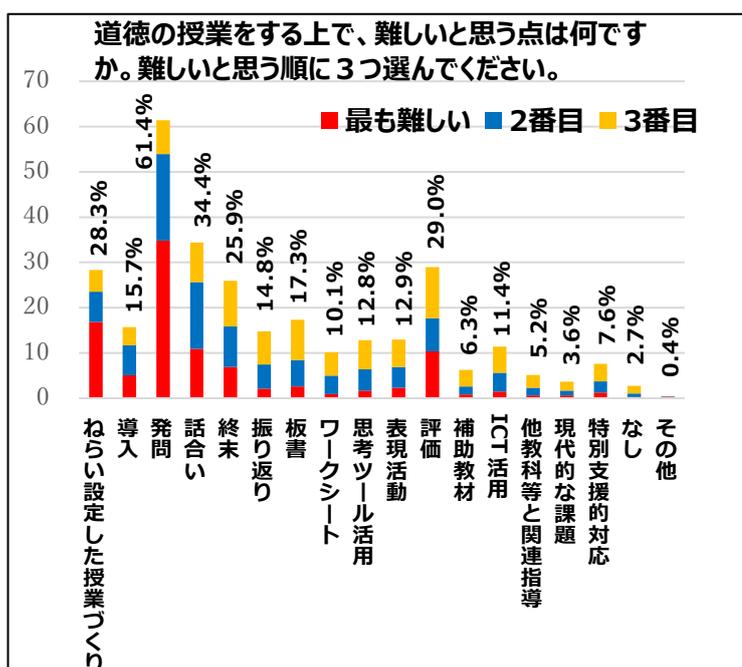


図18 道徳科授業づくりにおいて難しいと思うこと

(25.9%)であった。

この結果を、(オ)「道徳科授業づくりにおいて力を入れていること」と合わせて見ると、「発問」「ねらいを設定した授業づくり」「話し合い」などが共通してあることが分かる。道徳科授業づくりにあたり、教員が「力を入れている」が「難しいと思う」という視点で見ると、教員が道徳科授業づくりにあたり求めている情報を見出すことができると考える。

b インタビュー調査より

調査協力者に「道徳科授業のどんなところに難しさや困り感を感じるか」を聞いた内容は、表 10 の通りである。

表 10 「道徳科授業に難しさや困り感を感じること」の聞き取り内容（一部抜粋）

調査協力者	実際の回答
A 教諭	児童の発達段階のばらつきが大きいので、展開も配慮する。
B 教諭	色々な意見が出てきて「着地点」が分からなくなってしまうことがある。
C 教諭	求めたい価値観とずれてしまう時に、そのままでよいのか、働きかけた方がいいのか、悩むことがある。
D 教諭	教材のねらいに沿った発問なのかが違う気がする、よく分からない。
E 教諭	問い返しにも難しさを感じる。単調なやり取りになってしまっていて、深められないことがある。一問一答で終わってしまう感じ。
F 教諭	授業ではよいことを言っているけど、実際にはできていない。授業での学びが、実生活に結び付いていないと感じることが多い。
G 教諭	生徒の発問への反応を予想しきれない。
H 教諭	道徳教育推進教師として、相談できる人が欲しい。
I 教諭	導入で興味関心をもたせるところが難しい。
J 教諭	発問が難しい。特に、「中心発問」。話し合いがねらいからずれていってしまうことがあり、難しいと感じる。
K 教諭	練った中心発問で学習のねらいにたどり着けないことがある。
L 教諭	終末での教師の体験談の出し方や、学習のねらいからずれた時の修正方法が難しいと思う。
M 教諭	子供たちの予想外の回答への切り返しが難しい。また、子供たちが自分の考えに凝り固まっている時の言葉かけが悩みである。
N 教諭	子供たちが授業の中できれいごとだけ言って終わらないようにしたいが、それができないことがあることが悩みどころである。
O 教諭	意見を深めさせることができず、誘導してしまうことがある。
P 教諭	教材によって「こう答えるだろうな」という時に、どんな発問をするとよいか悩む。
Q 教諭	困ることは、子供が色々な意見を言った時のまとめ方。発問した後に、臨機応変にどうすればよいか分からないことがある。
R 教諭	発問をした後に、子供から出た回答に対する掘り下げ方、切り返し方、意図とは違うところに行ったときにどうするか。
S 教諭	子供の考えを引き出したいのだが、それができないことが多い。
T 教諭	問い返しをした時に、想定外の意見が来た時に悩む。

「a 質問紙調査 (Web アンケート)」から、「発問」に難しさを感じる教員が多いことが分かった。本インタビューを通して、教員が道徳科の発問

に感じる難しさについて、理解を深めることができた。

道徳科の発問では「基本発問（ねらいに迫るための中心発問を支える発問）」「中心発問（本時のねらいに迫るための中心となる発問）」「補助発問（基本発問ではそのねらいに迫れないときに補助的にする発問）」等がある（河合, 2018）。本インタビューから、教員が「中心発問」に限らず、「補助発問」についての情報も求めている様子が見えてくる。

- (ク) 道徳教育において育てることが重要だと考えること（質問紙調査（Web アンケート）より）

「道徳教育で、子供たちにどのような力を育てることが重要だと考えますか。（3つ選択）」という質問への回答は、小学校教員は図 19、中学校教員は図 20 の通りである。回答項目は、各学校種の学習指導要領内容項目とした。

図 19 から、小学校教員が道徳教育において子供たちに育てたい力は、選択率の高い順に「善悪の判断、自律、自由と責任（62.5%）」「親切、思いやり（48.7%）」「正直、誠実（26.1%）」となっていることが分かる。

そして、図 20 から、中学校教員は、選択率の高い順に「思いやり、感謝（61.5%）」「自主、自律、自由と責任（42.5%）」「相互理解、寛容（39.4%）」となっていることが分かる。小学校においても中学校においても、「善悪の判断、自律、自由と責任（小）—自主、自律、自由と責任（中）」と「親切、思いやり（小）—思いやり、感謝（中）」の選択率が高い。

この結果から、小学校においても中学校においても、子供たちに身につけさせたい基本的な内容として重視していることが分かる。これは、松田・土田（2019）の調査結果とも一致する結果となっている。教員が子供たちに育てたいと願う力に、大きな変化は生じていないことが考えられる。

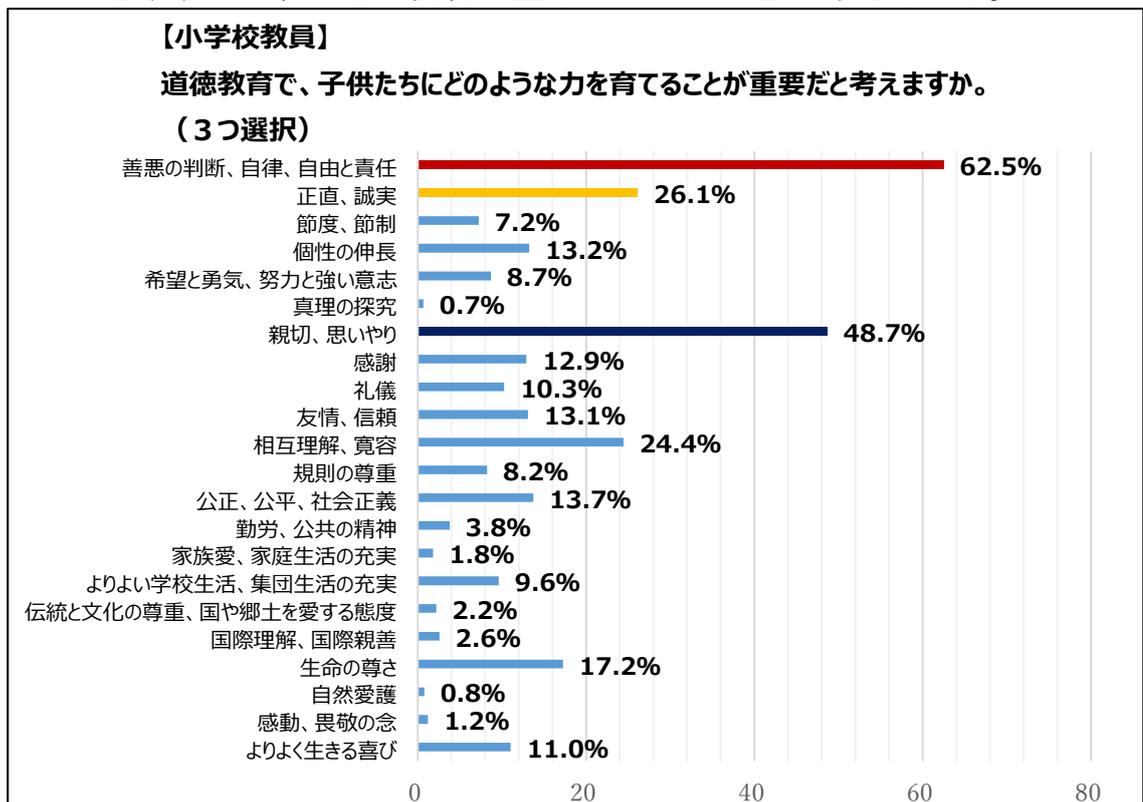


図 19 道徳教育で子供たちに育てることが重要だと考えること（小学校教員）

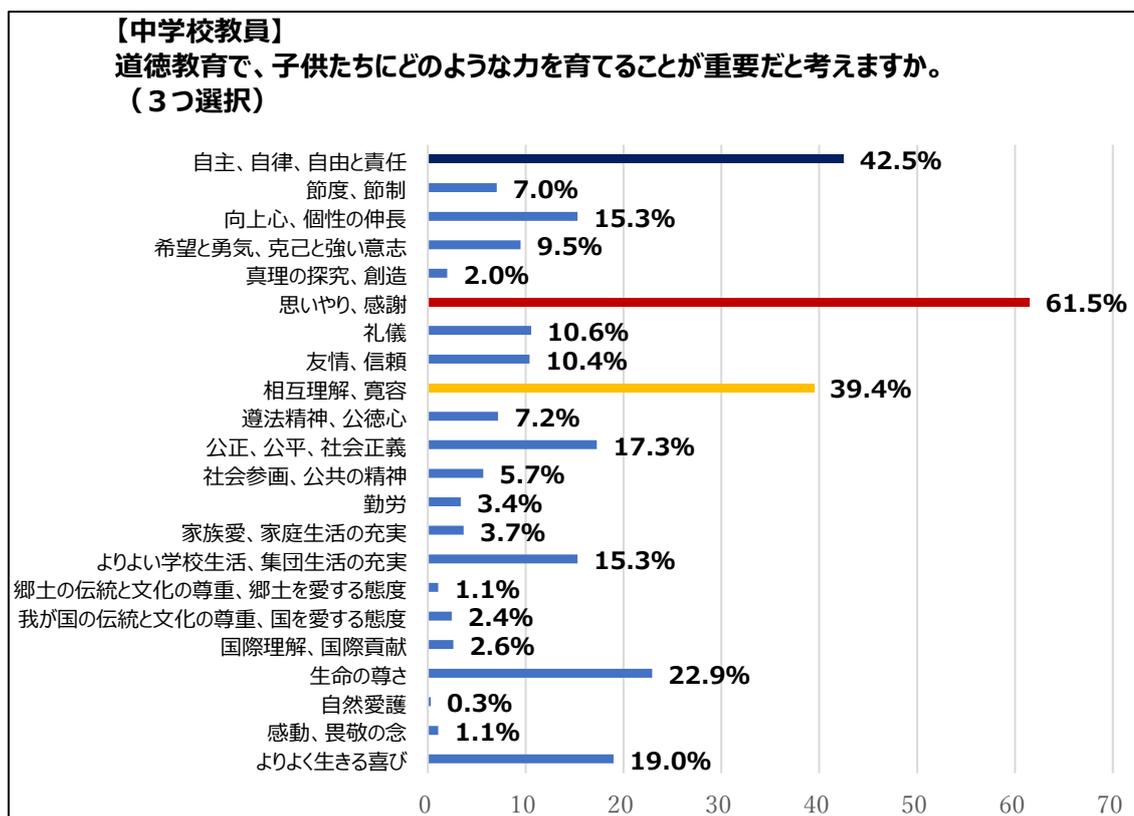


図 20 道徳教育で子供たちに育てることが重要だと考えること（中学校教員）

(ケ) 道徳科授業づくりについて

a 質問紙調査（Web アンケート）より

「道徳科の授業づくりをどのように行っていますか。（複数回答可）」という質問への回答を、教員経験年数別にまとめたものが図 21 である。

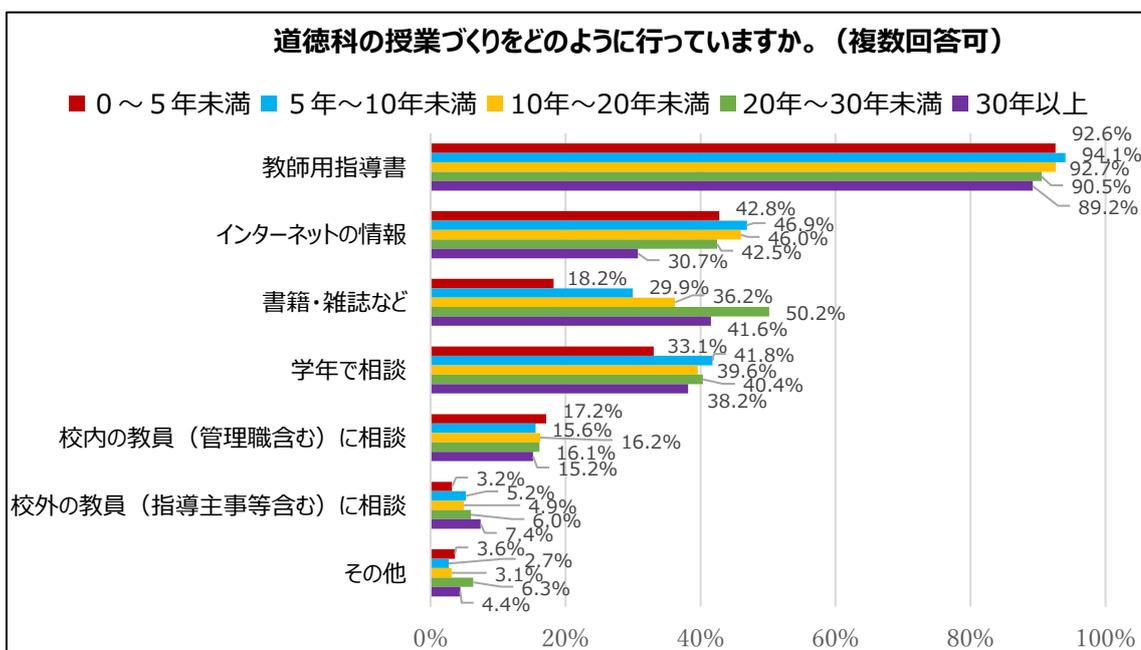


図 21 道徳科授業づくりをどのように行っているか（教員経験年数別）

その他として、「外部リソース利用（ニュース・テレビ・新聞などのメディアからの情報収集）」「他校実践例活用」「道徳に関する研修や学習会での学び」「指導案を参考にする」等が見られた。

教員経験年数に関わらず、約 90%の教員が教師用指導書を手掛かりに授業づくりをしていることが分かる。「書籍・雑誌など」から道徳科授業づくりの情報を求める教員の割合は、教員経験年数が上がると共に増加している。ベテラン教員が、より良い道徳科授業づくりのために最新の情報を求める様子がうかがえる。「学年で相談」している教員は 40%程であり、0～5年未満の教員は最も少ない（約 33%）。多くの教員が難しさを感じている道徳科授業だが、半数以上の教員が教師用指導書を頼りに道徳科授業づくりをしている様子がうかがえる。

b インタビュー調査より

調査協力者に「道徳科授業づくりをどのように行っているか」を聞いた内容は、表 11 の通りである。

表 11 「道徳科授業づくりをどのように行っているか」の聞き取り内容（一部抜粋）

調査協力者	実際の回答
A教諭	まずは教科書を読み、 授業は指導書を参考 につくっている。
B教諭	教材研究は、指導書を中心に 、板書計画や話し合い活動などを考えている。
C教諭	教科書についているワークシートを利用。それを使いながら展開。 指導書を見て発問 。
D教諭	指導書を見て発問を考えている 。指導書の発問がねらいに沿っていない場合はアレンジすることもある。
E教諭	主に教科書、赤刷りを見て、どんな主発問があるか、掲示物があるか考えながら行っている。
F教諭	教科書を中心に教材研究。中心発問をしっかりと考えている。
G教諭	指導書から大きくずれないように準備 している。
H教諭	指導書を使って教材研究 を行っている。研究編についても読み、価値理解、他者理解につながるようにしている。
I教諭	教科書と 指導書をよく読んで いる。
J教諭	教科書を読み、指導要領からはずれないよう発問や板書計画を考えている。
K教諭	教材を読んだ後、中心発問を自分で考える。その後、どれを伝えたいかな、ということを考えて、 指導書を見て確認 をする。
L教諭	道徳授業がよく分からないため、 指導書は欠かせない 。
M教諭	学年で相談し、 指導書に沿って準備 をしている。
N教諭	指導書を見て 、また、子供たちの実態を考えて授業づくりを行っている。中心発問を考えて、授業の全体像を作っていく。
O教諭	教科書をよく読み、実態はアンケート調査から把握し、発問や展開を考えている。
P教諭	基本的には教科書を読む、 指導書を参考 にしながら、生徒の実態から、考えやすくするにはどういけばいいか考えている。
Q教諭	事前に教科書読んで、ここで区切って、どんなことを聞こうかなと考える。 指導書を参考 にしている。
R教諭	指導書等から授業をつくっている 。加えて、インターネット等から、関連する映像を活用することも有る。
S教諭	基本は指導書にのっとり て授業をつくっている。
T教諭	指導書から発問を考え、流れを 考えて行っている。

「a 質問紙調査 (Web アンケート)」から、約 90%の教員が教師用指導書を手掛かりに授業づくりをしていることが分かった。本インタビューから、そのことが改めて裏付けられていると考える。L 教諭が「道徳科授業がよく分からないため、指導書は欠かせない。」と述べている。このように、指導書に頼って授業づくりをしている教員が多いことは、教員が道徳科授業づくりに難しさを感じていることや、道徳科授業への理解に自信がないことの表れであると考えられる。

(コ) 道徳科授業充実のために行っていること (質問紙調査 (Web アンケート) より)

「道徳科の授業充実のために、どんなことを行っていますか。(複数回答可)」という質問への回答は図 22 の通りである。

その他として「校内委員会の設置 (「道徳教育推進委員会」等)」「学年で組織的対応 (ローテーション道徳授業等)」

「保護者との連携・協力 (道徳科授業公開等)」等が見られた。

この結果から、現在、道徳科の授業充実のために個々の教員が研修を重ねたり、学校全体で取り組んでいたりする様子が分かる。道徳科授業づくりについての情報提供に加えて、授業力を高めるための取組方についての情報も学校及び教員にとって有用と考えられる。

(カ) 道徳科の指導力を高めるために重要だと思うこと

a 質問紙調査 (Web アンケート) より

「道徳科の指導力を高めるために、重要だと思うことはどんなことですか。(複数回答可)」という質問への回答は図 23 の通りである。

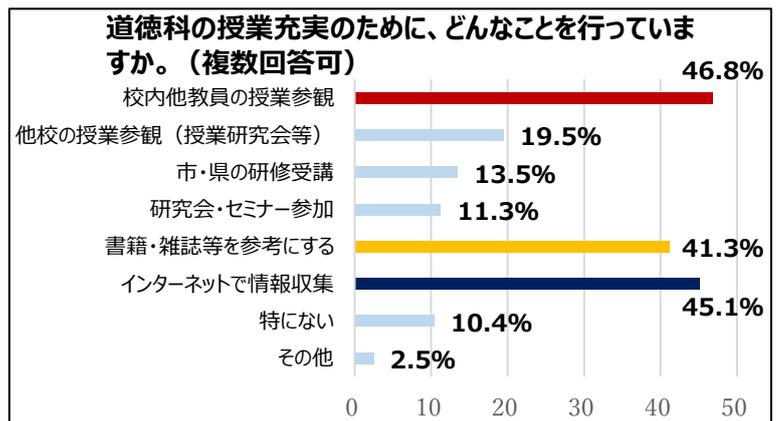


図 22 道徳科授業充実のために行っていること

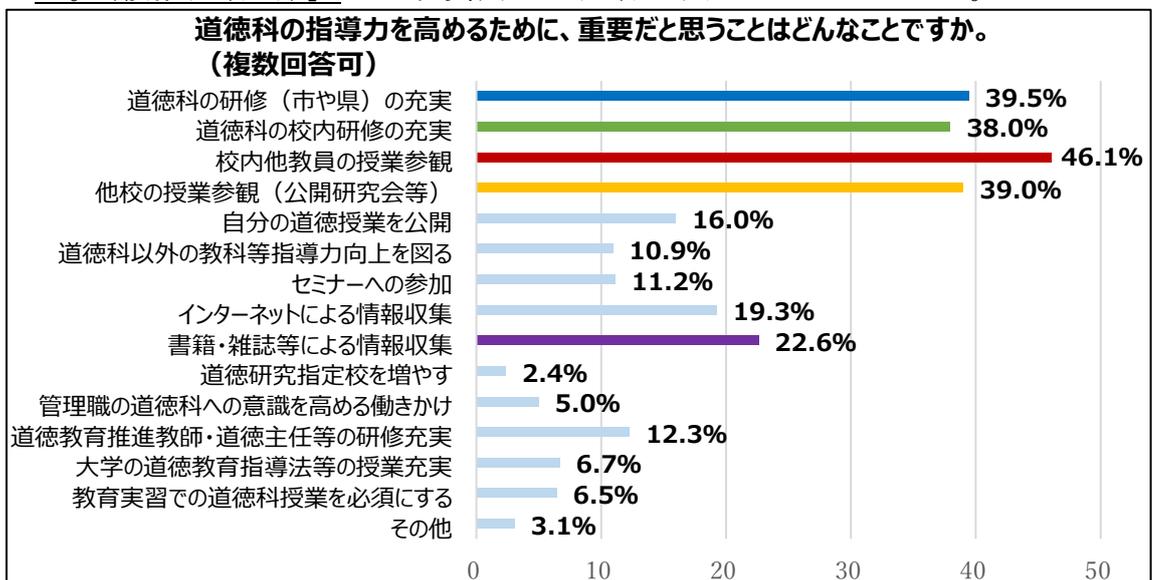


図 23 道徳科の指導力を高めるために重要だと思うこと

その他として「研修・サポート体制の充実（外部講師を招いた定期的な研修の実施、e ラーニング等いつでも学べる環境の整備）」「教材研究の時間確保（教員が丁寧に教材研究を行える環境整備等）」「協力・情報交換の促進（学校・学年内での協力や指導案の公開・共有等）」等が見られた。

選択率の高い順に「校内の授業参観」「市や県が主催する研修の充実」「他校の授業参観」「校内研修の充実」が求められていることが分かる。校内・校外での研修に加えて「授業参観」を求めている。これは教員が授業参観を通して、具体的授業のイメージを求めている思いの表れと考えられる。その他の回答からは、教員が道徳科授業の指導力向上のために環境整備を求める様子が見える。

b インタビュー調査より

(a) より良い道徳科授業づくりのために求める研修について

調査協力者に「より良い道徳科授業づくりのために望む研修」について聞いた内容は、表 12 の通りである。

表 12 「より良い道徳科授業づくりのために望む研修」の聞き取り内容（一部抜粋）

調査協力者	実際の回答
A教諭	発問の仕方や授業の進め方について知りたい。
B教諭	実践例を紹介してくれるような研修。掲示物の作り方や話し合い時の工夫や手立てなど学べるとよい。
C教諭	模擬授業で流れや展開を見て、その後に授業のポイント等 教えていただける機会があるとよい。
D教諭	授業参観 を通して、教師の働きかけと、それによる子供の変容・反応をセットで見ること、今後に生かせる研修になると思う。
E教諭	教材が同じでも、発問によってねらいとする価値項目が変わることがある。ねらいとする価値項目にたどりつけるようにするために、どんな発問にすればよいか。
F教諭	道徳の授業を参観 する機会があるとよい。
G教諭	よりよい道徳の授業を参観 する機会が欲しい。
H教諭	主発問の設定の仕方や、子供たちの思考をどのようにまとめていったらよいのか等、 体験型の研修 があるとよい。道徳推進教師の研修もあるとよい。
I教諭	授業は準備で決まってくると思うので、教材から、指導案・ワークシート作成までの 一連の流れを演習できる研修 がよい。
J教諭	指導案を作り、その授業を行うといった、 実践的な研修 があるとよいと思う。
K教諭	発問づくりに苦労しているので、それを考える 演習 や、作った発問で 模擬授業演習 をしたり、問い返しを実際にやり合ったりすると、授業実践の模擬練習になってよい研修になると思う。
L教諭	理論よりは実践を踏まえたもの があるとよい。
M教諭	実際に講師が先生役、受講生が子供役の 模擬授業 を行ってほしい。授業後は、 模擬授業を基にした講話 があるとありがたい。
N教諭	実際の授業を見る 機会があるとよい。
O教諭	授業づくりの素晴らしい先生の実践を知りたい。
P教諭	以前は、評価等についての知識面の共有を図る研修が役立っていた。今は、 他の先生方がどのような授業しているのか 見たい。

Q教諭	講話もよいが 授業実践を見たり、模擬授業を受けたりする研修の方がイメージが膨らんで良いと思う。両方あるとなおよい。
R教諭	道徳の基礎基本を皮切りに、授業で意識すること、指導案等形式に則ったやり方等、連続性のある、一つ一つ教えてもらえるような研修があるとよい。
S教諭	実際に 授業参観 ができるとよい。
T教諭	授業を見たり、模擬授業に参加したりして、授業イメージをもてる研修 がよいと思う。

インタビュー調査結果から、道徳科の基礎基本についての研修だけではなく、授業の参観や「参加・体験型」の研修を望む教員が多い様子がうかがえる。「a 質問紙調査 (Web アンケート)」において、道徳科の指導力を高めるために「校内の授業参観」や「他校の授業参観」を求める教員が多いことと重なる結果と考えられる。教員は、道徳科指導力向上のために「より良い道徳科授業イメージ」を求めていることが分かる。

(b) より良い道徳科授業づくりのために求める資料について

調査協力者に「より良い道徳科授業づくりのために望む資料」について聞いた内容は、表 13 の通りである。

表 13 「より良い道徳科授業づくりのために望む資料」の聞き取り内容（一部抜粋）

調査協力者	実際の回答
A教諭	特になし
B教諭	教科書に合った 動画やコンテンツ情報
C教諭	実践事例 の紹介
D教諭	実践のポイントが載っているもの がいい。実践のポイントとは、「外せないポイント」、ゴールがよく分からないので、授業のゴールのイメージのようなものがあるとよい。
E教諭	板書例や授業の流れ が示されているとイメージがしやすいと思う。
F教諭	授業で子供たちに提示できる、 授業の掲示物の情報
G教諭	実践事例に理論が伴っているもの がよいと思う。
H教諭	教材研究の方法についての資料 があると、校内研修でも活用できる。
I教諭	ワークシートや、画像・写真などの電子データ があるとありがたい。また、話し合いの進め方や効果的な ICT 活用法の情報があるとよい。
J教諭	発問例集 があるとよい。
K教諭	ICT 活用についての情報 があると嬉しい。
L教諭	実践事例集 があるとよいと思う。
M教諭	授業にそのまま生かせるような 指導案的な内容 があるとよい。また、映像教材等などの紹介もしてほしい。また、 評価の方法 について具体的なアドバイスがあるとよい。
N教諭	授業の様子が 見られる動画 があるとよい。
O教諭	ワークシート集やデジタル教材等の情報 があるとよい。
P教諭	余りありすぎても困ってしまうと思う。
Q教諭	発問に関する情報をまとめた資料 があるとうれしい。
R教諭	板書付き略案 といった 実践事例集 があるとよい。

S教諭	「これを見ると授業ができる」といった、指導案等があるとよい。
T教諭	授業で活用できる動画資料の紹介があるとよい。

インタビュー調査結果から、教員が道徳科の授業づくりにすぐ活用できる情報を求めている様子がうかがえる。これは、日々多忙を極め、なおかつ道徳科の指導に他の教科等以上の難しさを感じている教員にとって、切実な思いの表れであると考えられる。

千葉県では、県道徳教育資料として「道徳教育の手引き」（道徳教育に関する指針）（図 24）や「実践事例集『心豊かに』」（特色ある道徳教育推進校による実践事例集）が既に Web 上に公開されている。本調査研究では、実践研究を通して得た知見を「成果物」としてまとめる計画を立てている。これまで県で作成してきた道徳教育資料と相互に補完し合い、教員が日々の授業で活用しやすい資料の作成が求められると考えられる。

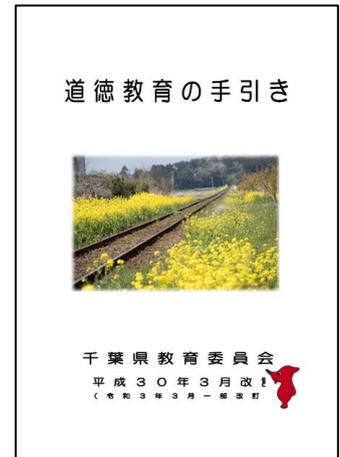


図 24 「道徳教育の手引き」（千葉県教育委員会）

- (シ) 道徳教科化によって、良い影響があったと思うこと（質問紙調査（Web アンケート）より）

平成 30 年度には小学校、翌令和元年度には中学校において、道徳が教科化され、全面実施された。その成果と課題の一部を調べる調査を実施した。

「道徳が教科化したことで、良い影響があったと思うことを教えてください。（複数回答可）」という質問への回答は図 25・図 26 の通りである。

図 25 は、質問に対して「特にない」と回答した教員と、良い影響について回答した教員の割合をまとめたものである。この結果から、29.1%の教員は「教科化による、良い影響はない」と感じている一方で、70.9%の教員が良い影響を感じていることが分かる。

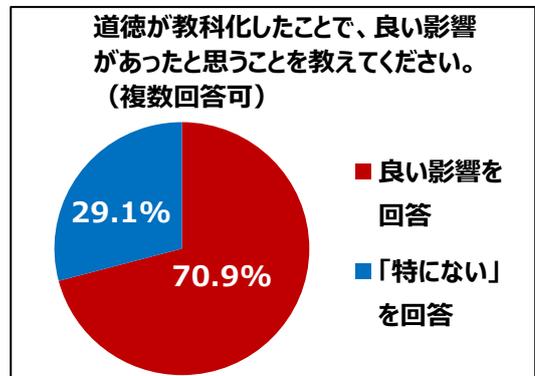


図 25 道徳教科化について、よい影響の有無について

図 26 は、道徳が教科化したことで、良い影響があったと思うことについての回答をまとめたものである。

その他として「授業の時間確保（毎週道徳科を必ず実施するようになった等）」「教員の意識向上（教員の道徳科に対する意識が高まった等）」「授業の質の向上（教科書があることで指導に安心感が生まれた等）」が見られた。

この結果から、道徳の教科化が目指した「量的確保と質的転換」が図られている様子がうかがえる。また、良い影響があったと思うこととして、「他教科等でも対話を意識するようになった」「子供たちの発言を大事にするようになった」がある。道徳科の指導経験が、他教科等の指導に良い影響を与え

る可能性がうかがえる。教員の道徳科指導力向上が、他教科等の指導にも良い影響を与える可能性を示す結果と考えられる。

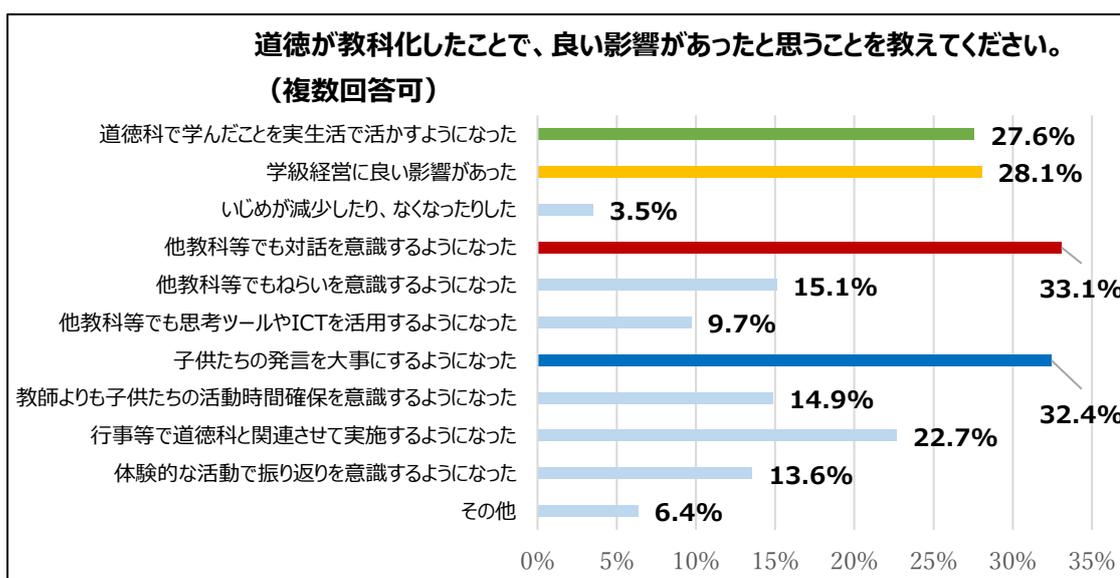


図 26 道徳が教科化したことで良い影響があったと思うこと（複数回答可）

(ス) 道徳教科化により生じたと思う課題

a 質問紙調査（Web アンケート）より

「道徳が教科化したことで、生じた課題はありますか。（複数回答可）」という質問への回答は図 27・図 28 の通りである。

図 27 は、質問に対して「特にない」と回答した教員と、道徳が教科化したことで生じた課題について回答した教員の割合をまとめたものである。この結果から、33.7%の教員は「教科化により生じた課題はない」と感じている一方で、66.3%の教員が教科化によって課題が生じたと感じていることが分かる。

図 28 は、道徳が教科化したことで生じたと感じる課題についての回答をまとめたものである。

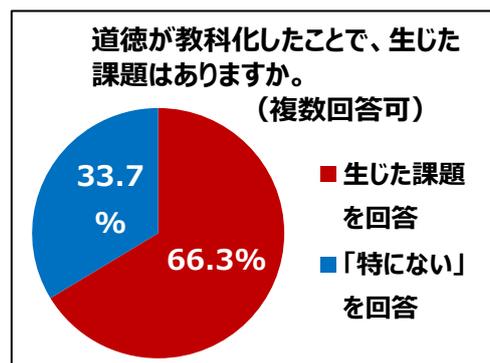


図 27 道徳教科化により生じた課題の有無について

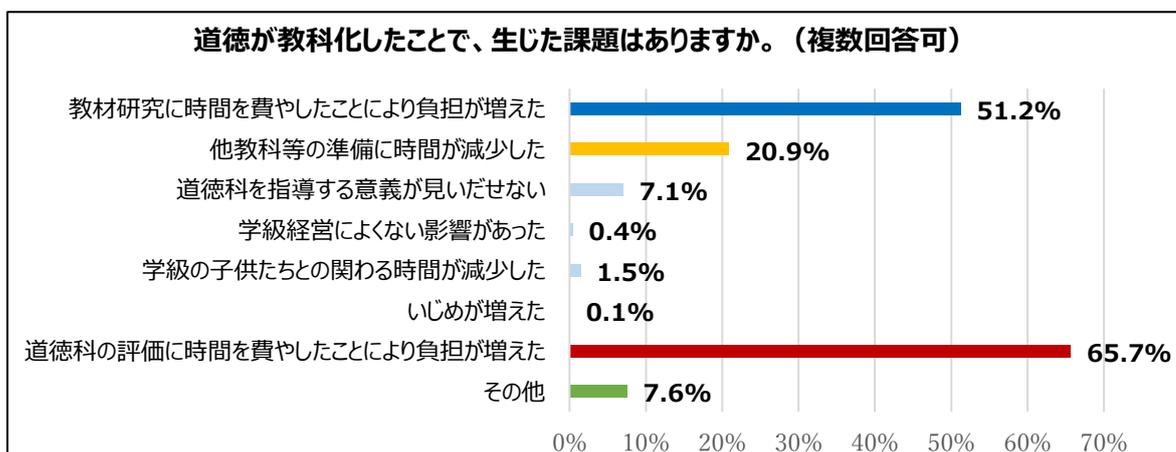


図 28 道徳が教科化したことによって生じたと感じていること（複数回答可）

その他として「評価に関する課題（指導要録や通知表に評価を記入することの負担、道徳科の評価が難しい等）」「教材に関する課題（教科書教材による授業が増え、オリジナルや以前の教材の使用が難しくなった等）」が見られた。この結果から、道徳の教科化が目指した「量的確保と質的転換」に伴う教材研究への負担や、教科化に伴って行うようになった記述式の評価について負担を感じている様子が見られる。

b インタビュー調査より

「道徳科の評価への負担」を感じている教員が多いことから、調査協力者に「道徳科の評価に難しさや困り感を感じること」について聞いた内容は、表 14 の通りである。

表 14 「道徳科の評価に難しさや困り感を感じること」の聞き取り内容（一部抜粋）

調査協力者	実際の回答
A 教諭	道徳科で子供たちの学習活動を評価するイメージはあるが、 児童生徒全員を上手に見取る（評価する） ことができない。
B 教諭	評価で生徒の考え方について疑問を感じることもあるが、それを否定できないので、 どう評価すればよいか悩むことがある。
C 教諭	授業でねらいとすることと子供たちの学習とに ずれを感じる時に、どう評価してよいのか分からない。
D 教諭	評価は難しい と思う。所見は一人一人に合わせたものなので負担である。
E 教諭	記述を基に評価する場合、それが曖昧だったり、ねらいとずれたりしている時、 どのように評価すればよいか、所見を書けばよいか分からないことがある。
F 教諭	道徳科の授業で、 どのように評価すればよいか自信がない。
G 教諭	学習状況の評価、というものがもうひとつ分からない。
H 教諭	大きくりなまとまりを踏まえた評価というものが分かりにくい。
I 教諭	道徳科の評価をどのようにフィードバックするか悩んでいる。
J 教諭	所見を書くのは大変 だと思う。
K 教諭	道徳性に係る成長の様子を把握するためには、どのような方法があるのか知りたい。
L 教諭	子供の変容を見取ることが難しいことから、 個人内評価をすることが難しい と感じている。
M 教諭	今年度、初めての学級担任のため、何がどのように難しいかまだイメージがつかない。
N 教諭	児童生徒の 学びの姿を見取るのが難しい 。また、 文章（所見）にするのが難しい 。
O 教諭	授業内で評価すると必ず変容するわけではないので、 それを見取るのが難しい 。
P 教諭	他教科と違って、こんなことができるようになったねということが認められればよいのかな、と考えているが、 自信がない 。
Q 教諭	所見は一人一人に合わせたものなので、負担が大きい 。
R 教諭	所見は、特に初任者には負担は大きい と思う。
L 教諭	子供の変容を見取ることが難しいことから、 個人内評価をすることが難しい と感じている。
S 教諭	授業の中で評価するということがなかなかできない 。

T 教諭	道徳科の評価は、数値ではなく、言葉で評価するため、教師による違い、力量が現れると思う。
-------------	---

道徳科の評価は「大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすることや、他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行うことが求められる」とある（解説, p. 110）。教員は、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子をどのように見取り、記述するかということについて難しさと、そのことに負担を感じている様子が見られる。

(七) 自由記述より（質問紙調査（Web アンケート）より）

「道徳科の授業をしたことで考えたことや気が付いたこと」について自由記述で調査を行った結果、583 件の回答があった。

自由記述の内容について、共通した回答内容ごとに類型し、まとめたものが表 15 である。

表 15 自由回答より（一部抜粋）

自由記述の内容 ※7	実際の回答
道徳教育の重要性	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳科授業は、学校教育活動全体と連携して行うことが重要であると感じた。 ・道徳科授業が生徒の心を動かすことができるかどうかを考えるようになった。
授業の準備と研究	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳科の教材研究が重要であると感じた。 ・他教科等とも関連づけた授業が効果的であることに気付いた。
教師自身の成長	<ul style="list-style-type: none"> ・教科化したことで道徳教育に対する自分の意識が変化した。 ・生徒の意見を尊重し、多様な考え方を受け入れる重要性を再認識した。
授業における課題	<ul style="list-style-type: none"> ・指導内容に対する理解に差があると感じた。 ・教材選定や評価方法に関する疑問が生じた。
評価における課題	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳科の評価方法に疑問を感じており、より良い方法を模索している。 ・教科書に基づく道徳科授業が、必ずしも生徒の内面に届いているとは限らないと感じる。

記述分析の結果から、教科化によって、教員の道徳科への意識が高まり、「道徳教育の重要性」を認識し、「授業の準備と研究」が行われ、「教師自身の成長」へつながったことがうかがえる。道徳の教科化が目指した道徳科授業の「量的確保と質的転換」がある程度達成できたことの表れと考えられる。一方で「授業における課題」や「評価における課題」も生じている声もある。これは、今後の道徳科授業づくりに関する調査研究が求められる教員の声と一致する結果であることが分かる。

ウ 調査結果のまとめ

2,475件の質問紙調査（Webアンケート）と、20名の調査協力者へのインタビュー調査の結果から、県内教員の道徳授業づくりに関する実態について下記のことを確認することができた。

- (ア) 道徳科の授業づくりに関する情報が求められている
 - a 道徳科への関心が高い教員が多い。
 - b 道徳科授業の基本的な展開について理解できていると認識する教員は多いが、道徳科の授業に迷いや難しさも感じている実態がある。
 - c 道徳科授業づくりにあたり、指導書に頼る教員が多い。
- (イ) まずは、若年層教員を対象とした支援・資料等の提供が必要
 - a 道徳科授業の基本的な展開について、若年層教員に理解できていないと感じている教員の割合が多い。
 - b 道徳科授業づくりに関して、特に若年層教員が難しさを感じている。
- (ウ) 道徳科授業づくりに関して教員が求める情報についての把握
 - a 道徳科授業の基本的な展開について理解できていると認識する教員は多いが、道徳科の授業に迷いや難しさも感じている実態がある。
 - b 道徳科授業づくりをする上で、「発問」「ねらいを設定した授業づくり」「導入」「話し合い」「振り返り」などに力を入れている教員の割合が多い。
 - c 道徳科授業づくりをする上で、「発問」「話し合い」「評価」「ねらいを設定した授業づくり」「終末」などに難しさを感じている教員の割合が多い。
 - d 「発問」については、「中心発問」や「補助発問」等についての情報や理解を求める教員がいる。
 - e 道徳科の評価について、分からなさや負担感を感じている教員の割合が多い。
- (エ) 求められている道徳科の研修や資料
 - a 基礎基本についての情報と共に、具体的な道徳科授業イメージをつかむことのできるような「参加・体験型の研修」を求める教員の割合が多い。
 - b これまで県で作成してきた道徳教育資料と相互に補完し合い、日々の道徳科授業づくりで活用しやすい資料であること。
- (オ) 道徳教科化を肯定的に捉える教員の存在
 - a 道徳科授業づくりによって、他教科等の指導に良い影響があったと捉える教員の声がある。
 - b 道徳教科化によって、道徳教育の重要性を認識したり、道徳科授業づくりに力を入れることで教師としての成長につながったと捉えたりする教員の声がある。

(2) 文献調査

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日 中央教育審議会）」（以下、答申）等を基に、これからの時代を生きる力を育てる道徳科授業づくりの方向性について文献調査を行った。

ア 目指す子供の姿

これからの学校教育が目指す子供の姿とは、どのような姿であろうか。

答申には、その姿として「持続可能な社会の創り手」「自立した学習者」というキーワードが挙げられている。これからの学校教育では、そのような姿を目指し、子供たちの資質・能力を育成することが求められる。(図 29)

5 成果と次年度に向けて

(2)次年度「成果物」等作成の方向性

②これからの時代を生きる力を育てる道徳科授業づくりの方向性

目指す子供の姿

「持続可能な社会の創り手」「自立した学習者」

子供の学びの姿

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業

学びを支える教師の姿

子供一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たし、 子供の主体的な学びを支援する伴走者

(参考)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 令和3年1月26日 中央教育審議会

図 29 これからの学校教育が目指す子供の姿(令和3年1月26日中教審答申より)

イ 子供の学びの姿

これからの学校教育で実現が求められている子供の学びの姿とは、どのような姿であろうか。

答申には、「各学校においては、教科等の特質に応じ、地域・学校や児童生徒の実情を踏まえながら、授業の中で『個別最適な学び』の成果を『協働的な学び』に生かし、更にその成果を『個別最適な学び』に還元するなど、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。」

(p. 19) とある。(参考：図 30)

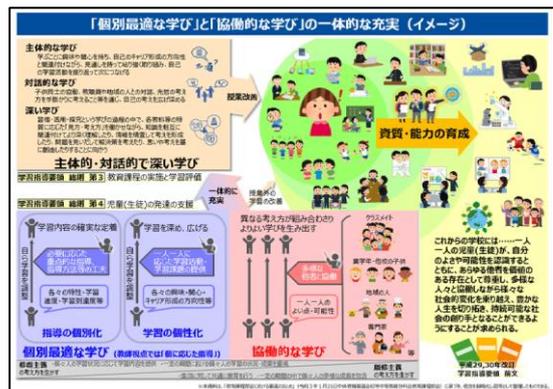


図 30 文部科学省初等中等教育局教育課程課資料より

道徳科においては、授業の質的転換に向けたキーワード「考え、議論する道徳」がある。答申における子供の学びの姿についての考え方は、道徳科ではどのような姿と表現できるだろうか。本調査研究では、その姿を令和5年度佐賀県教育センター個別実践研究を参考に、図 31 のように表現した。

つまり、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめる『個別最適な学び』を、そして多面的・多角的に考えるための『協働的な学び』を経て、自

己（人間として）の生き方について考えを深める『個別最適な学び』を一体的に充実させる。これらの学習活動を通して『考え、議論する道徳』の実現を図る」（図 31）のである。

次年度以降の実践研究を通して、これからの時代を生きる力を育てる道徳科授業における子供たちの学びの姿について、さらに調査研究を続ける。

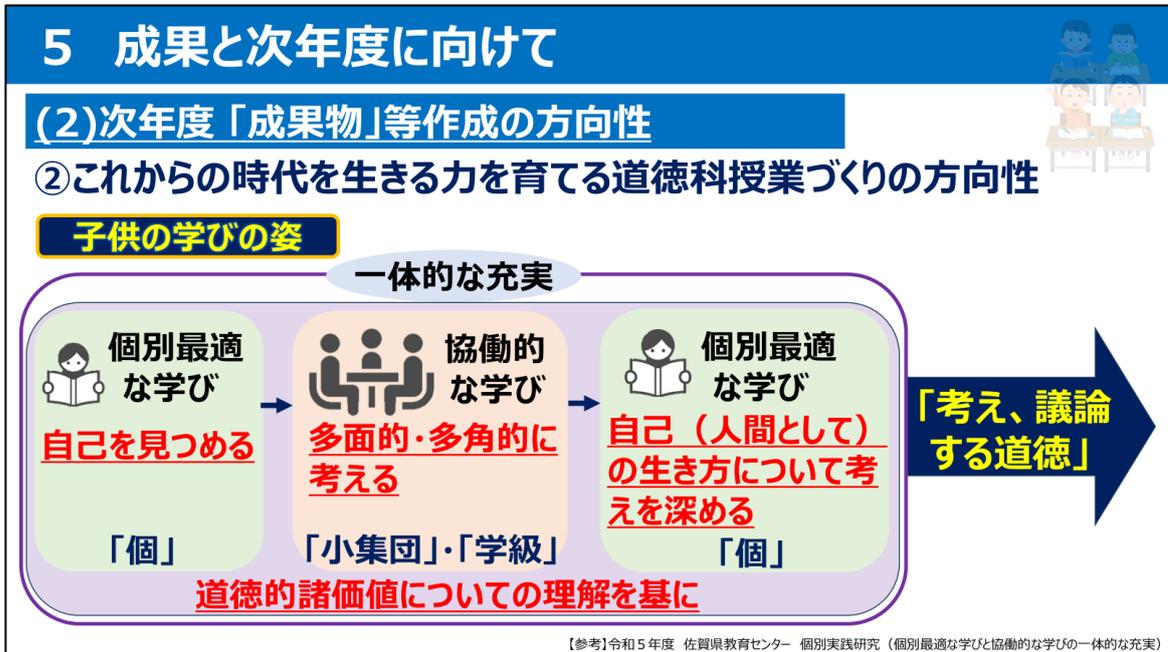


図 31 これからの道徳科授業における子供たちの学びの姿（イメージ）
（参考：令和5年度佐賀県教育センター個別実践研究）

ウ 学びを支える教師の姿

子供たちの学びを支える教師の姿として、答申では「主体的に学ぶ児童生徒の『伴走者』」と表現されている。答申の考え方は、道徳科においてはどのような姿と表現できるだろうか。

永田（2021）は、道徳科において、「伴走者」以外にいくつかの「関わりポジション」があると述べる。（図 32）それは、「先導者」「後援者」「見守り者」に

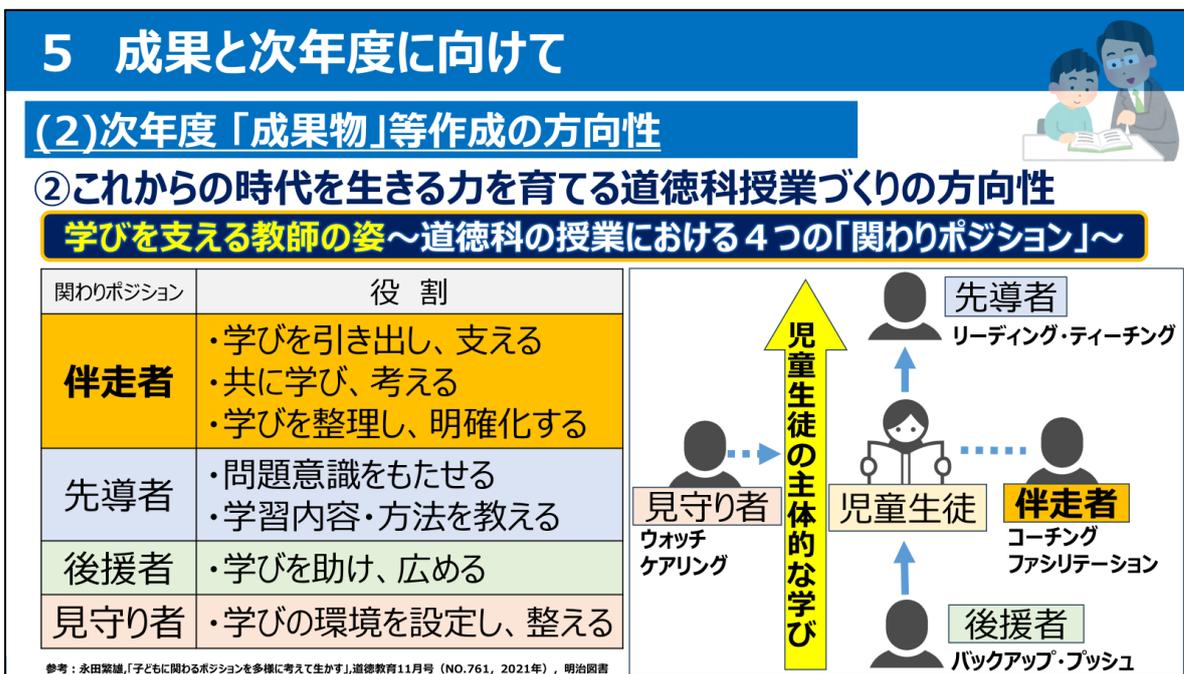


図 32 子供たちの学びを支える教師の姿（イメージ）（永田,2021 より）

大きく区分けができ、道徳科の授業では、その中でとりわけ「伴走者」が重要なポジションになると述べる。「伴走者」を主軸にしながらも、それをより効果的なものにするために、別のポジションへの移動を戦略的に織り込むことの重要性を述べている。

本知見も参考にしながら、次年度以降の実践研究を通して、子供たちの学びを支える教師のより良い姿についても、さらに調査研究を続ける。

7 研究のまとめ

(1) 成果

ア 2,400名超の教員を対象とした質問紙調査や、教員の実際の姿を確認する聞き取り調査から、県内教員の実態や、求める情報ニーズを確認することができた。

イ 文献調査から、これからの道徳科授業の姿、それを実現する子供たちの学びの姿、そして、その学びを支える教師の姿について確認し、表現することができた。

ウ 調査から、次年度の実践研究として、「成果物」や研修で活用するコンテンツについての作成に向けた方向性等を見出すことができた。(図 33)

(2) 課題

ア これからの時代を生きる力を育てる道徳科授業づくりの方向性を明らかにすることが求められる。

イ 調査から見出した知見を基に、教員の道徳科授業の指導力向上に寄与する成果物や研修コンテンツ作成を行うことが求められる。

5 成果と次年度に向けて			
(2)次年度「成果物」等作成の方向性			
①R7「成果物」構成 (仮)			
章	項目	章	項目
1章 はじめに	1.「これからの道徳科授業」について	2章 理論編	5.終末
	2.県の実態について		6.振り返り
	3.道徳科授業の学習活動		7.他の教科等と関連をもたせた指導
2章 理論編	1.「道徳科授業前」に大切なこと		8.評価
	2.導入	3章 実践編	1.授業実践事例
	3.発問(主発問・問い返し)		2.授業づくり事例
	4.話合い		3.道徳教育の推進



図 33 次年度に作成する「成果物」の構成案

【参考資料】

- 第4期教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）
- 第4期千葉県教育振興基本計画（原案）（千葉県／千葉県教育委員会）
- 令和3年度道徳教育実施状況調査（2022年3月：文科省）
- 「『特別の教科 道徳』についての小・中学校教員ニーズ調査」
松田憲子・土田雄一, 神田外語大学紀要第31号, 2019
- 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編（文科省）
- 「知りたいことがきつとわかる！道徳教育 Q&A」河合宣昌, 日本文教出版, 2018
- 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月26日：中央教育審議会）
- 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月版）文部科学省初等中等教育局教育課程課
- 永田繁雄, 「子どもに関わるポジションを多様に考えて生かす」, 道徳教育 11月号 (NO. 761, 2021年), 明治図書
- 令和5年度佐賀県教育センター個別実践研究（個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実）

【研究担当所員】

千葉県総合教育センター カリキュラム開発部

	部 長	鈴木 賢一
研究開発班	研究指導主事	中井 博明
	研究指導主事	串田 篤則（主担当）
	研究指導主事	多田 善光
	研究指導主事	橋本 淳
	研究指導主事	大塚 貴士
	研究指導主事	関 里英子

調査研究 中間報告 第463号

令和7年3月21日

発行責任者 千葉県総合教育センター
所長 酒井 誠一

発行所 千葉県総合教育センター

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2丁目13番

TEL 043 (276) 1166

FAX 043 (272) 5128
